The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	奥行きの経験
Author(s)	家高，洋
Citation	カルテシアーナ. 1995, 13, p. 73-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

奥行きの経験

家高　洋

はじめに

『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの課題は、「意識と自然との様々な関係を理解する」[1]ことである。特に感性的な知覚が主題的に論じられている場合、このことは、知覚の主体としての身体と自然的な世界との関係と言い換えられるであろう。また、メルロ＝ポンティが我々の存在の仕方、実存（existence）を、世界内存在（être au monde）と規定したことにおいても、この関係の重要性が表れている。メルロ＝ポンティは、自己を世界との関わりから考えようとしたと言えよう。

また、『知覚の現象学』の課題として、従来の哲学の枠組みを変えることも挙げられる。その際、メルロ＝ポンティが俎上に乗せるのは、経験主義と主知主義である。主知主義は、意識にはたらきがあるということを認める点で、経験主義よりも正しい（240～1）。しかし、主知主義は、意識のはたらきの性格を、全てを総合し構成する主観に、そして、全てを透明に見渡すことができる無世界的な傍観者としての主観に結び付けた。このことをメルロ＝ポンティは批判す

る。だからといって、意識や主観が無視されるのではない。「主観について言われることは、何ひとつ間違っていない」(488)。様々な経験の検討に基づいて、構成的な主観を認識する身体へ、悟性的な総合を「移行の総合」へと作り変えることによって、メルロ＝ポンティは、主知主義の難点を突破しようとしたのである。

しかし、メルロ＝ポンティ自身の解決は、本当に従来の哲学の枠を越えているのであろうか。このことが、小論の課題である。また、この解決とは別の可能性が『知覚の現象学』に含まれているのではないだろうか。このことを示すことが、我々のもう一つの課題である。

我々は、この二つのことを、「最も実存的な次元」(296)と呼ばれる奥行き(profondeur)の経験についてのメルロ＝ポンティの議論を検討することで、示したいと思う。

第1節 「奥行きについて」

「奥行きが見える」ということを、メルロ＝ポンティは問題にする。このことは、我々の通常の経験においては当然であると思われる。しかし、奥行きについての従来の説明は、それは見えない、とするか、あるいは、それを見えなくしてしまうのかのどちらかであった。それらの説明の根拠を検討することで、メルロ＝ポンティは、奥行き、そして、奥行きが見えるという事態を解明しようとする。

1 問題の所在

では、奥行きは、もともと見えないという、二つの主張をメルロ＝ポンティにしたがって検討しよう。古典的な経験

主義の代表者としてメルロ＝ポンティは、バークレーの論点を紹介している(294～5)。バークレーによれば、我々の網膜が外部の光景（spectacle）から受け取るのは、感性的には平面的な投影のみである。すなわち、私から対象への距離としての奥行きそのものは、我々のまなざしの下に展開されず、それは、ただ縮約された形で現れるだけである。それゆえに、我々は、奥行きそのものを見ることはできない。

奥行きが本来的には見えないという第二の主張は、主知主義の立場を採る反省的分析である。その主張は、以下の通りである(295)。たとえ奥行きが我々の目に描きこまれえたとしても、感性的な印象が差し出すのは、即自的な多様である。したがって、距離やその他の空間的な関係が存在するのは、その多様を辿り、それを総合し思惟する主観にとってのみである。だから、奥行き（距離）は、本来的には見えていないということになる。

メルロ＝ポンティは、これらの議論に直接に反論するのではなくて、それらの共通の前提を指摘する。つまり、この二つの説は、奥行きを「横から考察された幅」とあらかじめ同一視しているのである(295)。例えば、バークレーの立場にとって、奥行きという事態は、見ているものと見られているものとの間の距離とみなされる。そして、この距離（奥行き）がそのものとして見られるということは、それらの二つの物を横から見るということになる。横から見ることができるためには、見るものは、自らの場所を離れなければならない。しかし、このことは、実際には不可能である以上、距離は、そのものとしては原理的に見られえない、ということになる。

また、主知主義については、以下の通りである。構成的に思惟する主体が、感性的な多様を総合して距離を現出させるとしても、その距離がそのものとみなされうるためには、構成的な主体が既にその距離を何らかの仕方で知っていなければならない。既に知られているこの距離は、奥行きが見えないと主張する主知主義にとっても、結局、横から既に

見られた幅と同一視されることになる（ただし、主知主義の主体は、無世界的であるため、横から幅を見ることは原理的には可能であるという点が、経験主義とは異なっている）。

したがって、奥行きが見えないという、経験主義と主知主義は、次の二つの前提を共有していると考えられる。その第一の前提は、感性的な所与には、距離や奥行きは本来的に含まれていない、ということである。しかし、経験において、奥行きの現象が生じている。だから、両者は、この現象に何らかの仕方で対応しなければならない。その際、主知主義は、感性的な所与の総合を持ち出して説明し、経験主義は、この現象を距離そのものの現象ではないとみなした。しかし、いずれの対応の仕方にも、ある前提を根拠にしていた。その共通の（第二の）前提は、見ている者（私）と見られている物の両者とも、客体的なものとみなされ、そして、それらの関係が既に確定されている世界を想定する、ということである。そして、経験主義も主知主義も、このような世界を基準にして、その中の諸項や諸関係、真偽について論じているのである。

しかし、この説明は、我々の実際の経験を適切には取り扱えないであろう。なるほど、我々の日常的な経験においては、経験主義や主知主義の説明と同様に、奥行きは、横から見られた幅と同一視されている。だが、このことは、あくまでも、我々自身の個人のパースペクティヴから生じているのである（296）。我々は、自らのパースペクティヴにとどまりつつ、かつ、そのパースペクティヴを外部から客体として見ることができる別の視点に立つことは、原理的に不可能である（295～6）。それゆえに、このパースペクティヴを、奥行きと幅とが完全に等値されている世界の中の一項とみなすことは、我々の経験の独自性を取り逃すことになるであろう。

また、古典的な考え方が奥行きを「見えなく」してしまう、もう一つの理由は、奥行きが、客体それ自身の上に標示

されない、ということにある(296)。つまり、「見える」のは、この考え方にとっては、感性的に与えられたものだけなのである(「横から見られた幅」も「感性的に」与えられている)。奥行きが「見える」という経験は、したがって、認識や知についてのこのような枠組みを踏み越えることを我々に要求している、と言えるであろう。

2　奥行きの「標識」について

ところで、奥行きの経験は、その標識（signe）によっても「説明」されてきた。メルロ＝ポンティは、この「説明」に対するゲシュタルト心理学の批判を検討しつつ、自らの議論を展開する。まず、奥行きの標識を挙げることから考察を始めよう。

日常的な経験における奥行きの標識として、見かけの大きさ（grandeur apparante）が指摘される(296～7)。というのは、我々は、自己と知覚されている対象との距離を、その対象の見かけの大きさから推し量ると考えられうるからである。また、奥行きには、もう一つの標識が認められてきた。それは、両眼の収斂（convergence des yeux）である。例えば、ある対象が近づくにつれて、それを見つめる両眼は、ますます収斂する(297)。

古典的な見方によれば(297)、奥行きの経験は、一定の諸事実、すなわち、両眼の収斂と、対象の見かけの大きさという「奥行きの標識」を解読することによって成立する。その際、解読とは、「標識」を客観的な諸脈絡へと関係づけ、置き入れることを意味する。

さて、解読が遂行されるためには、解読されるもの、つまり「標識」が何らかの仕方で知られていなければならない。その上、その標識と、標識から読み取られるものとの関係も知られている必要がある。このように、「解読する」とい

う事態は、既に、幾つかの知を前提にしており、この先行的な知の成立についても、解明されなければならないので、「解読」という説明だけでは、我々は無限後退に陥るであろう。そうすれば、奥行きは、ますます見えなくなる。

そもそも、「標識」による奥行きの説明は、解読の基準として客観的世界を前提としている以上(297)、本節の1で述べたように認められないが、この説明の根本的な問題点は、次のことにある。すなわち、客観的な世界だけではなくて、どのようなことについてであっても、既に前提とされる何らかの知（知られていること）に訴えかけることによっては、経験の根本的な成立について適切にアプローチすることはできない、ということである。というのは、先行している何らかの知は、すでに、経験が成立している中で生じているのであるから。このことは、明証的な知であろうとも先行的、あるいは潜在的な「暗黙の」知であろうとも、知である限り、あてはまるであろう。

ところで、以上の我々の確認は、両眼の収斂や見かけの大きさという事態が、奥行きの成立に関わらないというのではない。標識と解読というモデルでは、これらの事態は、適切には解明されないのである。したがって、これらの事態と奥行きの経験との関係について、新たな概念を探さなければならない。

3　奥行きの成立について

ゲシュタルト心理学は、両眼の収斂と見かけの大きさとが、知覚そのものにおいては、明白には認識されないこと、にもかかわらず、それらは、立体鏡や遠近法の錯覚が示しているように、距離の知覚に関与していることを指摘している(298)。ここから、ゲシュタルト心理学は、それらが、奥行きの標識ではなく、その条件ないし原因であるという結論を引き出す(298)。

メルロ＝ポンティは、この結論に反対する。すなわち、両眼の収斂や見かけの大きさと奥行きとの関係は、原因と結果、標識とその意義との関係ではなくて、動機づけるものと動機づけられるものとの関係（300）、つまり、動機づけ（motivation）の関係にあるとメルロ＝ポンティは主張するのである。動機（motif）、動機づけについて、メルロ＝ポンティの説明（299〜300）に基づいて、多少自由にまとめれば、以下のようになる。(2)

動機づけられる事態は、その成立の起源を、ある一定の事実に持つが、その事実だけでは、動機づけられる事態を、すべて発生させることはない（例えば、網膜像という物体的な器官で生じる出来事だけでは、意識における視像の発生を説明できない）。そうではなくて、その事実は、動機づけられる事態が現れ、展開される「きっかけ」、つまり、動機なのである。この事実が「きっかけ」としてはたらきうるためには、それを、動機づけられる側は、何らかの仕方で引き受ける必要がある。そして、引き受けることができるためには、動機づけるものに対処し、それを含み入れることができる何らかのシステムが、動機づけられる側に成立していなければならない。

一見、動機づけるものは、「きっかけ」であるために、動機づけられる側よりも先行しているように思われる。しかし、動機づけられる側は、動機づけるものを引き受けることができる以上、動機づけるものよりも、ある意味では、先行し独立していると考えることができる（しかし、そう考えなければならない、ということはない）。この独立性こそ、動機づけの関係の中で、注目されることであると思われる。

「事実上」、動機づけられるものは、動機づけるものなしには、ありえない（現れない）。だが、動機づけという関係においては、「原理的には」動機づけられる側は、それだけで独立させて考察することができる。しかし、この独立性は、不動である、とか、常に生じているということではない。実際、奥行きは、常に生じているわけではないし（308）、

また、それが生じていても、錯覚である(303〜4)ということもあり得る。だが、このような「主観的な」不完全さが存在するのも、そもそも経験において、奥行きの現象が生じうる、つまり、奥行きを現しうるシステムが存在しているからである。「主観的」あるいは「客観的」という規定は、このような具体的な経験が成立して初めて、意味を持つのである。では次に、以上のような動機づけの関係を、奥行きの経験の成立に即しつつ、具体的に明らかにしていこう。

さて、両眼の収斂や網膜像の大きさは、主に、脳生理学の解剖学によって観察されるのであるから、生理学的次元に属していると言うことができる。他方、見かけの大きさは、奥行きと同様、現象に関わる経験の次元に属している。それゆえに、この二つの次元と奥行きの経験との関係が、検討されなければならない。

まず、生理学的な次元と経験の次元との関係について、メルロ＝ポンティの議論を追ってみよう。両眼の収斂においては、メルロ＝ポンティによれば、遠くの対象へ向かっていること（orientation）が既に前提にされている(300)。[3] また、対象の見かけの大きさと、その網膜像との関係について、例えば、「遠ざかる対象の見かけの大きさは、その網膜像と同じようには変化しない」(300)ということをゲシュタルト心理学は示している。したがって、奥行きの現象の成立に関して、両眼の収斂などの生理学的な次元は、原因とはみなされない。

次に、見かけの大きさと、奥行きという、両者とも現象しており経験の次元に属する事態の間の関係を検討しよう。我々の経験において、自己と対象との距離は、対象の大きさから分かる以上、対象の見かけの大きさの現象は、距離（奥行き）の現象の原因ではないだろうか。そもそも、見かけの大きさとは、どのような事態と考えられるのであろうか。まず、我々は、見かけの大きさそのものを考察する。そして、見かけの大きさと距離との関係を明らかにしよう。

すでに述べられたように、対象の見かけの大きさとその網膜像とは対応していない。このことを考察の手掛かりにし

てみよう。ゲシュタルト心理学によれば、我々の知覚に対して、近づいてくる対象は、その網膜像よりもゆっくり増大し、遠ざかっていく対象は、それよりも、ゆっくり減少する(300)。また、遠ざかっていく対象の見かけの大きさは、幾何学の遠近法が指定する大きさよりも、大きい(301)。

網膜像以外に、見かけの大きさの成立に関与しているのは、形や大きさの恒常性（constance)、つまり、物の恒常性だ、とメルロ＝ポンティは主張する(301)。この恒常性が存在するから、見かけの大きさの変化は、網膜像の変化よりも緩やかなのである。また、メルロ＝ポンティによれば(301)、この恒常性は、ある固い対象が圧力に抵抗するように、パースペクティヴ的な様々の変形に抵抗することはない。では、見かけの大きさにおける恒常性とは、どのような事態なのであろうか。

見かけの大きさは、我々が経験している視野においては計られない、とメルロ＝ポンティは言う(301)。このことが、見かけの大きさにおける恒常性の特徴を示している。例えば、知覚された灰皿の直径を尋ねられても、我々は、両眼を開いているかぎり、答えることはできない。自発的に片目を細めてみたり、あるいは、測定の器具を灰皿に押し当てることで初めて、計られうる「大きさ」が生じる(301)。したがって、物の大きさの恒常性とは、計られえないというように現れる「独立性」を示していると考えられる。

しかし、我々の具体的な経験において、見かけの大きさが様々あり、それらの間で、大小が決められるとも思われる。対象の見かけの大きさの多様性と、「計られえない」という物の恒常性の事態とが明らかにされることによって、我々は、ようやく、見かけの大きさの現象と距離（奥行き）の現象との関係について論じることができる。

第2節 「奥行きと志向性」

1 奥行きと時間性

さて、例えば、二百歩離れたところにいる人は、五歩離れている場合よりも小さいのではないか。この問いに対して、メルロ＝ポンティは、次のように答える(302)。「知覚された脈絡から彼を引き離して、見かけの大きさを測定するならば、そのとおりである。それ以外の場合には、彼は、より小さくもなければ、といって、等しい大きさでもない。つまり、彼は、等しいとか等しくないとかいうことの手前にいるわけである。彼は、遠くから見られた同じ人なのである」。

以上のように、メルロ＝ポンティは、見かけの大きさの多様性と、「計られえない」物の恒常性とを両立させようとする。しかし、どのようにして、この両立は可能になるのであろうか。まず、見かけの大きさの多様性を、メルロ＝ポンティは、その対象の現れ方、対象についての把握 (prise) の程度とみなす(302)。例えば、二百歩離れている人の姿は、五歩離れている場合よりも、ずっとはっきりしておらず、まなざしの把握は、ずっと少なく、正確ではない。

しかし、把握の「程度」が我々に対して生じるためには、対象についての「完全な」把握が存在しなければならない。そうでなければ、把握の「程度」ということは、無意味になるであろう。メルロ＝ポンティによれば、程よく明瞭に対象「そのもの」が見られているという「完全な」把握が、「同じ」ということ、つまり、物の恒常性の基礎となる (349～50)。その上、そのつどごとに完全な把握が経験に介入していないならば、把握の「程度」がそのものとして体験されることはないであろう。したがって、具体的な経験においては、見かけの大きさの多様性と物の恒常性とは、別々に経験されることはあり得ない。

以上の事態が、メルロ＝ポンティによって、知覚する主体の可能性(309)、つまり、その行為（geste）の射程範囲(308)と結び付けられる時、奥行きの問題は、時間性（temporalité）から理解され、解決されることになる。メルロ＝ポンティは、以下のように、奥行きの現象へ時間性を導入する。

「私が、遠くの対象を見る、と言うとき、私が言おうとしているのは、私がそれをすでにつかんでいる、あるいは、私がそれをまだつかんでいるということ、つまり、その対象は、空間においてあると同時に、未来ないしは過去においてある、ということである」(306)。つまり、空間的な共存の次元は、時間的な継起の次元から理解される(307)。

したがって、遠くの対象を見るということには、メルロ＝ポンティによれば、次の事態が含まれている。すなわち、遠くの対象は、もしそのそばにいたら持つであろうような「実際の」大きさを備えつつ、ここに居る私に対して現れている、という事態が生じている(307)。このようにして、見かけの大きさの把握の程度が、知覚する主体の可能な連続的推移という時間性に読み変えられるのである。

さて、この連続的な推移が生じるのは、表象や措定的な思惟によるのではなくて、意識のパースペクティヴの本質的な構造によるとメルロ＝ポンティは主張する(380)。各々のパースペクティヴは、その志向的な諸地平によって、他の様々なパースペクティヴへ際限なく差し向けられている。志向性のこの嵌入（emboitement）の構造によって、我々は、自らの現前野に留まると同時に、志向的に遍在し(382)、また、我々の各々のパースペクティヴは、途切れなく次のパースペクティヴに移ることが出来るのである。

具体的な知覚の経験は、パースペクティヴの連続的なこの推移によって成立している。この事態をメルロ＝ポンティは、「移行の総合（synthèse de transition）」と呼ぶ(307, 380)。奥行きの経験は、したがって、志向性に基づく「移

行の総合」によって成立すると考えられる。

2　メルロ＝ポンティの解決の検討

さて、我々の検討は、メルロ＝ポンティのこのような解決を否定してしまうことではない。ただ、この解決は、我々が冒頭で述べたメルロ＝ポンティの課題に答えているかどうか、検討してみたい。

我々が挙げた課題は、次の二つであった。まず、知覚の主体と自然的世界との関係を解明すること、そして、この解明が、従来の哲学の枠組みを突破して、「身体や世界や物や他者」(419)の問題に新たな理解をもたらすことであった。この突破は、具体的には、総合や主体の規定によってなされるといえよう。つまり、メルロ＝ポンティは、移行の総合を主張し、主知主義における構成的で傍観者的な無世界的とされる主観の概念を変えようとしたのである。果たして、このことが根本的になされたのか、ということが我々の疑問である。

奥行きの成立の検討によって、知覚の主体が「全てを構成するがゆえに、全てを透明に見渡せる」主観とは無関係であることは示されたであろう。というのも、経験のパースペクティヴ的な性格を欠いている以上、このような主観にとっては、そもそも奥行きは生じず、それは、「見えない」からである。

メルロ＝ポンティは、奥行きの経験の構造を知覚の主体の時間性から理解した。しかし、その解決において、主知主義的な主観の規定が、そのままではないが、根本的にはまだ残っていると我々には思われる。

奥行きの経験の成立には、メルロ＝ポンティによれば、程よく明瞭に対象そのものを見ることが必要である（本節の1）。すなわち、ある対象を見ている主体が前提されている。時間性による説明において、それは「対象をつかんでい

る」主体である。このような主体の志向的な遍在可能性(382)が、奥行きの成立の根拠になっている。では、この主体のどのような点が問題なのであろうか。

それは、第一に、このような主体が、「見る」あるいは「つかんでいる」主体として以外に規定されず、主体自身は、実際には規定されていない、ということにある。そして第二に、この主体は、対象あるいは世界を「見る」以上、それらに対して存在することになり、その限りで、主体が世界の「中に」存在していることを適切に考察することができなくなると思われる。結局、主知主義的な主観の問題点は、全てを構成する、ということだけではなくて、対面的に傍観するという性格にもあったのである。

しかし、知覚の主体は身体である以上、全てを透明に見渡せず曖昧さが残る、ということを、メルロ＝ポンティは主張しようとしたのではないだろうか(241)。確かにそうである。そして、メルロ＝ポンティのこの主張もそのとおりである。だが、問題は、その場合でも「見る」ということがそのまま残っているのである。メルロ＝ポンティの「解決」は、「曖昧さ」という見ることとの程度に関わっているので、従来の主知主義の主観の性格を「原理的には」そのまま引き継いでいると言えよう。対象を「感じる」主体を導入しても、事態は変わらない。

そもそも、主体自身の規定とは、どのようなことであろうか。例えば、主体自身の現れ方をその規定とすればよいのではないか。しかしながら、何らかの仕方でこの規定が成功したとしても、この規定が主体自身だけに関わり、「主体が対象を見ていること」をそのままにするならば、問題は、根本的には解決されてはいない。主観でも、世界でも、その現れ方だけに着目する場合は、同様であろう。では、どうすればよいのであろうか。

ここで、メルロ＝ポンティの課題として、我々が初めに挙げたことを思い出してみよう。それは、「意識と自然との

様々な関係を理解する」(489)ことであった。メルロ＝ポンティが「世界内存在」という表現で言おうとしたことは、自己と世界との根本的な関係であろう。したがって、世界との関係から自己を規定するということが、我々には残されていると思われる。

この時、問題は、自己、世界、そして両者の関係の内実を明らかにすることである。実は、メルロ＝ポンティは、この問題を十分に解明したとは言えないが、少なくとも、それに取り組んでいると思われる。このことを、次節で示してみたい。その前に、我々は、ある基本的な概念について検討しよう。それは、従来の哲学だけでなく、メルロ＝ポンティの説明においても重要な役割を果たしている。その概念とは、志向性、特に、意識の志向性である。

3　志向性について

ところで、「奥行きが見える」という事態は、現象学におけるある別の事態を連想させる。それは、「過ぎ去った時間がそのまま意識される」ということである。ここで、我々は、奥行きの現象とフッサールの初期時間論の成果とを突き合わせながら、志向性という概念を検討してみたい。なお、フッサールの議論は、現前野における「経過現象（Ablaufsphänomene)」についてである。(4)

奥行き（距離）の現象と経過現象とは、類似した点がある。それは、延長するものそのものが、ある一点において現れる、ということである。つまり、奥行きの現象では、空間的な距離が、「ここ」において、そして、経過現象では、過ぎ去った時間が、「今」において、それぞれ現れている、ということである。この限りでは、両者は、同じ問題系列にあるとみなされうるであろう。

次に、フッサールの時間論の説明とその問題点とを簡単にまとめてみよう。フッサールによれば、そのつどごとの意識の相（Phase）は、意識以外の対象的な物に志向的に関係しているだけではなく、その一つ前の意識の相にも、志向的に関係して、それを含んでいる。そして、今の原印象（Urimpression）の相は、それ以前の全ての意識の相を志向的に含んでおり、そして、その一部を直観的に保持しているために、今において経過現象が現れるのである。

ところで、ある意識の相が意識されるのは、フッサールの規定によれば、次の意識の相においてである。それゆえに、一番新しい意識の相である原印象、つまり、今の意識の相は、次の意識の相が生じないときには、意識されないことになる。意識の中に、「意識されていない」意識の相が「ある」、という難問にフッサールは陥ったのである（フッサールは、原印象は意識されていると主張するが、その根本的な解明は行っていない）。したがって、フッサールの説明によれば、経過現象においては、経過（過ぎ去ったこと）は原理的には全て現れるが、経過現象が現れる今の意識の相自身は、もちろん経過の中には含まれず、それ自身としても現れないということになる。

さて、奥行きの現象において具体的に経験されていることを取り出してみよう。奥行きの現象とは、ある対象と私との間の距離が、ここにいる私において現れる、ということである。つまり、二つの項の間で結ばれている関係が、その関係項の一つにおいて現れる、という矛盾した事態が生じている、と言えよう。

これに対して、経過現象についてのフッサールの説明は、次のようにまとめられる。つまり、今の意識の相において、今より以前の全ての意識の相が現れる、つまり、ある一つの項において、それとは別の諸項が現れるということである。そうであるならば、奥行きの現象と経過現象との類似性は、全く消えていると言えよう。どうしてこのようになってしまったのであろうか。

それは、フッサールが、経過現象を志向性によって解明しようとしたからであると考えられる。志向性は、元来、二項間の関係がモデルになっている。すなわち、志向的な関係とは、具体的には、一つの項が（志向的に）別の（諸）項を持つ（含む、保持する、など）という関係である（この際、志向するものが意識であろうと、身体であろうと同じである）。例えば、主観が客観を、意識が対象を持つ、というように。

奥行きの現象は、このような関係ではなかった（実際、時間の現象においても、そのつどごとの今は意識されていると思われる）。奥行きの現象が我々において生じ、それを全て錯覚と見なさない以上、奥行きを適切に取り扱うためには、奥行きに独自な事態、つまり、関係がその関係項の一つにおいて現れるということが、忘れられてはならない。そして、具体的な経験における奥行きのこの事態を認めるならば、我々は、志向性、特に意識の志向性を以下のように考えることができるであろう。

志向性という概念は、この具体的な経験からその一部が取り出されたものである。つまり、経験における二項間の関係だけが注目され、「志向性」として取り上げられ、時には固定され、他方、関係自身の現れは取り上げられなかったのである。[5] したがって、志向性という概念だけでは、（経過現象を含む）時間現象、そして奥行きの現象も、原理的には解明されえない。

では、志向性は、仮像であったのか。そうではない。志向性は存在する。ただし、ある考え方においてのみ、そうなのである。それゆえに、志向性のこの抽象的な性格を考慮しないかぎり、例えば、志向性を「基礎づける」ということや「非志向的意識」という概念も、無意味となるであろう。

「奥行きが見える」という経験に従った我々は、いまや、志向性の概念を限定してしまったために、その解明のため

の出口が塞がれたように思われる。しかし、はじめに述べたように、メルロ＝ポンティは、十分な解決ではないとしても、何らかの解明への方向性を我々に示してくれるはずである。それを次節で検討してみたいが、まず、これまでの議論を整理してみよう。

第3節　「空間と自己」

1　問題の整理

さて、我々の問題は、「奥行きが見える」という経験に対して、より適切にアプローチすることであった。まず、奥行きの現象は本来的には成立していないと主張する古典的な経験主義と主知主義とが検討された。その結果、これらの二つの説は、我々の経験のパースペクティヴ的な性格を無視する前提に立っていることが明らかにされた。次に、ゲシュタルト心理学の主張が検討された。それは、奥行きの経験の成立に関係している両眼の収斂と見かけの大きさとを、その「原因」とみなしたのである。しかし、それらは、原因ではなくて、動機であること、そして、我々の経験の独自な関係である動機づけとが明らかにされた。

ところで、「奥行きがみえる」ということは、我々の出発点になっている以上、この事態を、主知主義などのように「説明する」必要はないだろう。というのは、このような説明が必要なのは、奥行きを見えなくさせる諸前提を認める場合に生じるからである。しかし、それらの諸前提が我々の経験に即したものでないことは、すでに示された。

だから、現実の経験から離れてそれを説明しようとする問い、例えば、「実存は、なぜ空間的であるのか」とか、「存在は、どうして方向づけられているのか」ということは、問われなくてもよい(291)。なぜならば、このような問いが

立てられるのは、「これらの事実が、空間とは関わりのない主体と客体とに生じる偶然」とみなされる場合だけであるから(291)。したがって、空間を「基礎づける(fonder)」必要はない(293)。奥行きの経験に関しても同様であろう。では、「奥行きが見えない」と主張する諸説に反対して、「奥行きが見える」ということを主張することで十分なのであろうか。

いや、そうではない。「奥行きが見える」という現実の経験に関与する知覚の主体、つまり身体の概念や、空間や世界の概念、そして、両者の関係についての概念が、新たに作り上げなければならないのである。これがメルロ＝ポンティの実際の課題であった。

メルロ＝ポンティは、奥行きの現象を、物の恒常性とその見かけの大きさの多様性とが両立する経験として捉え直した。そして、見かけの大きさの多様性は、それについての知覚の主体（身体）の把握の程度とみなされ、その程度は時間性から解明された。つまり、奥行きという空間的な関係は、諸パースペクティヴの志向的な内含（implication）あるいは嵌入構造に基づく主体の時間的な行動可能性から、すなわち「移行の総合」[6]から理解されたのである。

その結果、知覚の主体は、自らのパースペクティヴに留まりつつ、志向的に遍在しているとして、他方、知覚の世界は、知覚の主体の現前野の拡張(351)として考えられた。経験から離れず、また、主体と世界との概念を変えることによって、奥行きの独自性、つまり、お互いに排除しあう諸パースペクティヴが同時に現在するという事態(306)は、最終的に解明されたように思われた。

しかし、時間性によるこの説明には、一つの前提があった。それは、個々のパースペクティヴが成立していること、すなわち、何らかの客体的なものが見られていることである。その結果、これを見ている主体自身は、「見ている」と

いうこと以外には規定されず、結局、それは、主知主義の傍観者的な主観の性格を共有することになった。メルロ＝ポンティにとっての奥行きは、まさに、「主体と世界との差し向かい（vis-à-vis）」（309）、つまり、対面的な志向的関係から考えられていたのである。したがって、古典的な哲学の枠組みを越えようとするメルロ＝ポンティの課題は、この説明においては果たされていないとみなされるであろう。

ところで、我々は、時間性が導入される奥行きの経験、つまり、物の恒常性とその見かけの大きさの多様性とが両立している経験から検討を再開したい。我々は、まず、この経験、特に、物の恒常性の経験に空間が関わっていることを指摘して、次に知覚の主体としての身体の一般的な規定を取り出し、最後に、身体と空間との関係を、上下などの空間の基準の在り方についての考察から浮き彫りにするつもりである。

2　規範としての物と空間

さて、我々の経験において、物は、形や大きさを様々に変えつつも同一のものとして現れている。この同一性の成立には、ある特権的な知覚が関与しているとメルロ＝ポンティは主張する(348〜9)。つまり、顕微鏡での観察における最適な焦点のように、それぞれの対象には、それについて最もよく見られうる知覚があり、この知覚における大きさと形が現実（réel）とみなされる。そして、このような知覚が「規範（norme）」(349)となることによって、見かけの様々な形や大きさにおいて、同一的な物が現れるのである。

また、このような知覚は、メルロ＝ポンティによれば、客体的なものについての現実的な経験である(367)。「知覚と行動とにおける最大の鮮明さが、知覚の土壌（sol）、私の生の基底、私の身体と世界の共存（coexistence）にとって

の一般的な場を規定する」(290)。したがって、この経験が「現実的」であるのは、単に対象が明瞭に与えられているだけではなく、このような経験においてのみ、我々が実際に行動することができ、行動の主体も確立しているということによっている。(7)「外的な経験の基盤の上でのみ、すべての内的な経験は可能である」(349)。

ところで、明瞭な知覚に基づく「規範」は、最大限に明瞭ではない「通常の」知覚において、どのように存在するのであろうか。それは、例えば、見かけの大きさや形と比較される「心像」のようなものとはみなされないであろう。というのは、我々に感性的に与えられているのは、見かけの大きさや形の現れ（apparence）だけである以上、比較という事態は生じないからである。この規範は、したがって、最も明瞭な知覚に本質的に関係しているとしても、非感性的な性格を持つために、この知覚そのものではないとみなされる。通常の知覚においては、それゆえに、見かけの大きさなどの感性的な現れと、非感性的な「規範」とが同時に生じている。(8)

個々の物のこの「規範」をメルロ＝ポンティは、「普遍的なモンタージュ（montage universel）」、「類型（typique）」、あるいは「世界の論理」(377)へと拡大する。この表現の仕方にだけ注目すれば、モンタージュとは、存在者の形式や範疇と見なされるかもしれない。しかし、メルロ＝ポンティは、「身体を持つということは、普遍的なモンタージュを所有すること」(377)であり、また、世界についてのある種のモンタージュは、身体の定義である(350)と主張する。このことを、我々は、規範としての最も明瞭な知覚と空間との関わりから解釈し、そして、この解釈に基いて、知覚の主体としての身体の一般的な規定を取り出してみよう。

さて、我々が注目したい点は、この「規範」は、現出する対象の意味や内実だけにかかわっていない、ということである。というのは、対象が最も明瞭に適切に見られるということには、「最適な（optimal）距離」や「典型的な向き」

(348)が含まれているのである。つまり、物の「規範」には既に、知覚の主体との関係（距離、向き）が関わっていると考えられる。

それでもやはり、この場合には、対象「そのもの」(349)が問題にされているのではないかと反論されるかもしれない。しかし、対象を呈示する際に自ら自身を忘れさせてしまうことが知覚の特性であり、その狡智なのである(69)。例えば、私に対して斜めにある対象は、不均衡として体験される(349)。規範が介在しているからこのような体験が生じるのであるが、不均衡という体験は、対象の形だけではなくて、私と対象との関係、斜めであるということをも、そのまま示していると思われる。このように考えれば、ある程度明瞭な「通常の」知覚においては、知覚されている対象と、その対象と知覚の主体との関係とが常に知覚されているとみなされるであろう。最も明瞭な特権的な知覚とは、したがって、適切な距離と向きにおいて存在する知覚の主体の把握が最も完全に抵抗なく絡み合っている知覚であって、だからこそ「規範」なのであるが、しかし、それは、知覚の主体と無関係であるとは考えられない。

距離に関しても同様である。体験された見かけの大きさ、つまり、知覚の主体が対象の現れについて把握する程度が、そのまま、対象と主体との距離や奥行きを表現する（exprimer）のである(300)。両眼の収斂、見かけの大きさ、そして距離は、「それぞれをお互いに象徴し示しあっている。それらは、ある一つの状況の抽象的な諸要素であって、その状況においては、お互いに他方と同義なのである」(302)。

すなわち、知覚の主体である身体のそれぞれのはたらきは、それぞれが協力しあって、空間的な関係という言わば「客体的なもの」を表すことができるのである。この「表す」ということが、世界のモンタージュとして身体を定義する内実であると思われる。[9] ここでは、現に（actuel）はたらいている身体と、そのはたらきの「論理」としての世界と

が着目されている。世界、特に自然的な世界を表すということに基づいて、メルロ＝ポンティは、知覚の主体としての身体を一般的に規定したのである。

以上のように、個々のパースペクティヴにおいても距離や奥行きの現象が生じており、そして、この現象は、世界のモンタージュに即した身体のはたらきによって成立することが明らかにされた。つまり、奥行きの現象は、志向的な嵌入構造に基づく「移行の総合」とは別の仕方で解明されうるのである。(10)

しかし、この場合、モンタージュ、あるいは「世界の論理」とは、認識を可能にする条件としてのアプリオリな形式のようなものではないだろうか。また、この「論理」に関わる身体は、一挙に、主知主義の構成主観になってしまったのではないか。そこで、世界の論理の一つと考えられる空間の基準の在り方を検討して、身体と、そのはたらきの論理としての世界との関係についてのメルロ＝ポンティの考え方を最後に示唆してみたい。

おわりに

ところで、我々は、自らの経験に留まるかぎり、空間の基準は絶対に固定されているように思っている。しかし、メルロ＝ポンティは、この現実の経験が解体され、再び生じつつある事態を紹介し検討している。それは、空間の向きに関するストラットンとウェルトハイマーの実験である(282～94)。

それらの実験で明らかにされていることは、視野全体の向きの根本的な変化が、ある一定の期間の後に、もとに戻るという事態である。ストラットンの実験では、網膜像の正立によって、視野は逆向きに、そして、ウェルトハイマーの実験では、それは斜めに呈示されている。(11)

メルロ＝ポンティによれば、これらの実験の過程は、以下のように説明される(288〜91)。視野全体の変化によって経験は、非現実的になる。しかし、身体は世界を捕らえようと活動し、変化した視野全体が身体によって的確に把握された時、空間の新たな基準が設定される。その時、身体（知覚の主体）は、そこへと「住みつき（habiter）」行動できるようになって、現実の経験が再び生じる。

さて、この説明において、空間の基準の在り方に関して次の三つのことが注目される。まず第一に、視野全体の変化の後、空間の向きが設定されない非現実的な経験が生じる以上、空間の基準は、認識のアプリオリな形式のように常に我々の経験を支えているのではないということである。つまり、空間の基準とは、我々の行動が従わせられる、先在的に与えられた絶対的な基準ではない(291)。

第二に、基準が設定されるためには、身体の把握という何らかのはたらきが必要であることである。この把握そのものが基準を産み出すわけではないから、それは、基準の現出のためのきっかけ、動機であるとみなされる。(12)

第三に注目されることは、世界が把握され、新たな空間の基準が成立したとき、主体自身がそこに「すみつく」ということである。つまり、身体は、逆説的にも、自らが動機づけた事態の中で行動する。産み出すもの（naturant）と産み出されるもの（naturé）との関係が逆転するのである（56n.）。それゆえに、身体は、経験を一方的に構成する主知主義的な主体ではないと考えられる。このことが生じるのは、新たに設立されるものが、単なる対象的なものではなくて、知覚の主体としての身体自身が含まれる空間の基準であるからである。

したがって、空間についての現実的な経験には、常に次のことが含まれている。空間の基準の成立に関わる何らかの主体のはたらきがあること、そして、その主体は、その空間の「中に」現実に存在し、行動するということ、この二つ

が一緒にあることになる。このことが生じるのも、知覚の主体としての身体は、世界の論理に従ってはたらいているからである。この場合、知覚は、「世界のそのつどごとの再-創造あるいは再-構成」(240)と考えられるであろう。

『知覚の現象学』における以上のような主体と、主体のはたらきの論理としての世界との考察は、従来の哲学の枠組みを越える一つの道を示しているのではないだろうか。

注

(1) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. 489. 以下、省略して本文中にページを表す数字のみを記す。

(2) メルロ＝ポンティは、動機づけの関係を意味（sens）から説明しようとしている(299~300)。この説明では、動機づけるものが意味によって動機づけられるものに関わるという、両者の言わば「接点」が強調されている。一方、我々の考察は、両者の「分離」の関係を示す「基づけ（Fundierung）」の観点(147~8, 451)からなされている。

(3) この問題は、両眼視における単一像の成立の検討において詳細に論じられている(266~70)。

(4) E. Husserl, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins* (1893-1917), Husserliana Bd. X, Martinus Nijhof, 1966. なお、経過現象についてのフッサールの解明の変遷に関しては、拙稿「フッサールにおける時間意識の作用について」(『カルテシアーナ』第一二号、大阪大学文学部哲学哲学史第一講座、一九九四年）を参考にして頂ければ幸いである。

(5) 志向性がこのように採り上げられたのは、意識とその対象との志向的な関係という、初期のブレンターノやフッサールの問題設定からすれば、当然であろう。

(6) 意識の志向的な嵌入構造だけでは、『知覚の現象学』における「移行の総合」は汲み尽くされない（例えば、39）が、この総合について志向性が中心的な役割を果たしていることは否定できない。

(7) 距離や奥行きの経験も、対象の知覚に関わっている以上、このような「現実」の知覚に基づいている。また、一般に、ある程度具体的に規定された志向性も、対象が明瞭に与えられた知覚に立脚していると言えよう。このことは、例えば、対象につ

いての内的地平と外的地平、あるいは、風景についての志向的な諸地平の成立に関係している。他方、「非現実的な」知覚、例えば、分裂病患者の幻覚（hallucination）などにおいては、具体的に連関しあった志向的地平は存在していないように思われる(385~97)。

(8) この観点においては、我々と対象の間の距離は、「ある規範を巡って揺れ者く張力（tension)」(349)とみなされている。

(9) この「表す」ということは、対象を志向していることとは別であると考えられる。つまり、このことは、身体のそれぞれの状態が動機となって、対象的なものの現れの成立に関係していることを示している。例えば、「私にとって、私の身体の各々の態度は、ある光景を一挙に成就する能力なのである」(349)。

(10) 距離の経験は、「世界の論理」からも説明されている(58~60)。そこでは、この論理は、「ことばなき論理」、「無言の言語」と呼ばれている(60)。

(11) ウェルトハイマーの実験の特徴は、被験者は動かないということにある。したがって、空間の基準の設定には、運動による探索は不必要であることが明らかにされた(287)。

(12) 空間の基準は、現れることによって初めてその効力を持つというように存在する。このような事態に対して、法則としてのゲシュタルトに関する説明が参考になる。メルロ＝ポンティによればゲシュタルトは、「世界の現出そのものであり、世界の可能性の条件ではなく、ある規範の誕生であり、ある規範に従って実現されるのではない」(74)。空間の基準の設定に関しても同様であると思われる。

つまり、これらの事態は、経験の構造自身の根本的な変化を示している。だから、この事態は、一方的な産出による因果的説明や、潜在態から顕在態への移行という説明（例えば、空虚な志向的地平の充実化）によっては適切に理解されないであろう。したがって、非現実的な経験における現れる以前の基準について論じることは、それを実体化あるいは無化してしまうことにつながるならば、この基準を適切に考える可能性を塞ぐであろう。

動機づけという現象学の概念こそが、連続的な説明を拒む経験の構造を解明することへの手がかりになると思われる。それゆえに、メルロ＝ポンティも言うように、動機づけるものを列挙したり、それらの間の「関数的関係」を叙述することだけでは不十分であろう(356~60)。この概念から経験全体を再考することが必要なのではないだろうか。

（博士課程学生）